

7 番目のノエル

藤原ライラ

僕が僕でなくなろうとも、貴女が貴女でいられるのならば、これ以上の幸福はないのです。

七番目のノエル

1) ファーストインパクト

「えっ、お見合い？」

目の前の友人が無造作に言ったその単語を、シャロン＝アシスタシアは聞き返さずにはいられなかった。

「そう、お見合い」

シャロンの驚きに反して、ノエルは平然と言い放つ。くるりとストローを回すと、氷がからからと軽い音を立てた。

学舎の隅にあるこのカフェで、二人は人を待っている。いや、厳密には彼らは「人」ではないが。

ノエル＝ヴァッサーリンゼ。

流れる金髪に、涼やかな青い瞳。美術品のように整った容姿の彼女は怪訝そうにシャロンを見つめる。「なんでそんなに驚くの？」とも言いたげに。この第三上級学校でも屈指の富豪の一人娘である彼女は、シャロンの無二の親友でもあった。

「あのね、シャロン。お見合いって言うのはね、」

余程シャロンの様子がおかしかったのか、ノエルはそう続けた。

「あれでしょう、親同伴で結婚を前提にお付き合いをすることを目的に顔合わせをすることでしょう？」

「そうそう。『ご趣味は？』で始まって『まあ後は若い二人で』で終わる、あれ」

平日の昼間にやっているお気に入りのドラマで仕入れた知識でしかなかったが概ねは外れていないらしい。

「そう。じゃあ別にノエルは『どうして貴方なんかに会わないといけないのよ、ふざけないで何様のつもり？』だなんて言う気はないのね」

「ないよ。……ってわたしをなんだと思ってるの、シャロン」

「それはそう簡単には教えられないわね」

くすり、と含み笑いを浮かべると、ノエルは少し頬を膨らませた。とりあえず敵意剥き出しで特攻するわけではないのだと知って、シャロンは少し安堵する。

「にしても、どうしていきなりお見合いなんてしようと思ったの？」

出来るだけ穏やかに、シャロンはノエルに尋ねた。シャロンの知る限り、「お見合い」などというものはノエルの最も嫌うものであったはずだ。試しに、お昼のドラマさながらに奥の座敷に正装をして大人しく座るノエルを想像してみるが、ちっとも似合わない。

「別に。あの人に言われたから」

あの人、という単語だけがひやりと冷たくシャロンの頸筋を撫でていった。ノエルは母親のこ

とを控えめに言ってよく思っていない。そんな母親がセッティングしたお見合いをどうしてノエルが二つ返事で受けることにしたのかが気になったが、この調子では聞いても答えてくれないだろう。

「日取りはいつなの？」

「今週の日曜日」

郊外の洋食店で昼食を食べるらしい。日取りを自分が決める代わりに、場所は相手側に決めてもらったとノエルは言った。

「……お母様は来られるの？」

「来ないわ。相手の両親とはもう会ってあるから、貴方達で好きにしなさいっメッセージが着た」

「あの人のやりそうなことよね」と答えるノエルの視線は、ガラス張りのドアの向こうへ注がれている。それを見てやっとシャロンは合点がいった。

——気を惹きたいのね。

他の相手に気があるようにみせて、本命の相手を嫉妬させる。不器用な女の子がよく使う恋の常套手段だ。

いつも通り時間きっかりに現れた二つの人影のうちの一つは、シャロンを見つけるとニヒルに笑って軽く手を振った。もう一つは顔色一つ変えずに一礼する。お辞儀の角度はきっかり三十度。これもいつものこと。

「待たせたね、シャロン」

「お迎えにあがりました、お嬢様」

シャロンに軽口を叩いた方がツキシロで、ノエルに抑揚のない口調でそう言ったのがクサナギ。クサナギの隙のなさはきっちりとアイロンのかけられたシャツにまで表れている気がする。

クサナギを一瞥すると、飲みかけのアイスミルクティーの代金をきっちり置いて、ノエルは「じゃあ、また明日ね」と立ち上がった。すたすたと歩いていく小さな背中に、長身瘦躯のクサナギは歴然たるコンパスの違いを駆使し難なくすぐに追いついて、少し後ろを続いて歩いていた。

今のこの時代、使用人を雇うよりロボットを買った方が経費は安く上がる。加えてロボットはどんなにこき使っても人権だなんだと主張したりしないし、大事な娘に手を出したりない。母親達は、自分の腹から生まれたやわらかい生き物を鉄の塊に抱かせる。清く正しく子供を育ててくれる、家事人形《ハウスドール》。上級学校へ通うような子供は、皆自分のロボットを持っていた。

無論、シャロンとノエルも例外ではなく。

シャロンのロボットは、先程までノエルが座っていた席に腰掛けると、まるで人間のようにニコニコと、嬉しそうに笑った。

呼称は、クサナギ。

それがノエルが幼い頃から彼女の傍にいるロボットだった。

十五年前にスプリング社から最初に量産化されたKタイプにはごくごく基本的な日常生活に必要な機能しかなく、“笑う”機能のないクサナギの表情はまさに完全なるポーカーフェイス。

「もう、時間ないものね」

「そうだね」と答えたツキシロの平坦さに際立った自分の声の感傷にシャロンは内心苦笑する。Kタイプに遅れること五年後に製造されたTタイプのツキシロは、笑うことも出来るが、いつも微笑んでいるので逆に表情が読めない。ツキシロはシャロンが八歳の時の誕生日プレゼントだ

。

完璧で完全なロボットにも唯一にして最大の欠点がある。

それにおいては、笑うことのできるツキシロも、できないクサナギも同じだった。

だからノエルはあの母親の言うことを聞いてまで大芝居を打つことにしたのだろう。

そこまで考えてから、ふと大切なことに気付いて、シャロンはパンっと、手を打った。

「あ、そういえば、お相手がどんな人が訊くの、忘れたわ」

*

窓から差し込んだ光に揺れる、ふわふわの茶色の髪が綺麗だった。

窓際のこの席を予約したのは相手側だから、そこまで計算された自己プロデュースならばなんて嫌な男なのだろうと思ったが、彼は困ったようにはにかむだけで、そこまで性悪なわけではなさそうだった。お見合いにはお決まりであろう自己紹介で彼が名乗った名前をノエルは覚えていない。どうせもう二度と会うこともないのだ。小難しい料理のメニューの横文字と一緒に、頭の隅に追いやった。

形だけ母親の意向を汲んでお見合いなんてしたが、ノエルにはどんな男が来ても絶対に好きになんかならないという自信があった。ノエルの目的は別にある。この男は、適当な理由を付けて断ればいい。どうせあの母親は上手くやるだろう。

背はあまり高くなかった。百八十センチのクサナギよりはきっと随分小さい。それでも平均的な女子の身長よりやや低いノエルが見上げなければいけない程度には大きいのだけれど。灰色のストライプの入った細身のスーツはよく似合っていた。

彼はよく喋り、よく笑った。そつのないお手本のような話術。あの母親が選んだのだからきっと文句のつけどころのない、申し分のない立派な家格の一流企業の御曹司なのだろう。社名も名乗ったはずだが、ノエルはそれも覚えていない。温室育ち独特の、苦勞を知らない笑顔は鏡を見ているようで、それがたまらなく嫌でノエルも笑った。世間を知る必要のない可哀想なお坊ちゃん。悲しいことにノエルは容姿だけはそこそこ以上に整っているの で、これは彼にとって結構な「攻撃」となるだろう。

——ごめんね、わたしなんかが相手で。

彼が繰り返す質問には、「そうですね」と「はい」を適当に駆使して、あとは曖昧に微笑んでおいた。別に彼が悪いわけでも何でもなし。全てはただの同族嫌悪だ。

時計を見遣る。三時まであと二時間。それまではどんなに嫌でも、ここに居なければならない。花のように笑って、猫をかぶって。

よく煮込まれた仔牛は好きでもなんでもない相手と差し向かいで食事をするという苦痛を差し引いても美味で、ここを選んだ彼のセンスを隠然と示した。そう言えばシャロンが「あそこはいいお店よ」と言っていた気もする。気取ったわけでもない、けれど完璧なテーブルマナーで彼は仔牛を食して、そこから匂い立つような育ちのよさがまた嫌だった。

氷のようなガラスに綺麗に盛られたデザートのアイスクリームをちびちびと食べ終える頃になってやっと、店のドアのベルがカランカランと響いた。

すぐに顔を上げたいのを抑えて、ゆっくりと視線をドアの方へと向けた。視線の先には愛想の欠片の感じられない仏頂面のクサナギが立っていた。

「お嬢様、お時間です」

いつでもいいと言われたのに、わざと予定の入っているこの日を指定したのはそうすれば途中で切り上げて帰れると思ったからで、クサナギは「お相手に失礼ですよ」と咎めたが、ノエルが断固として日取りを変えないと言うともう何も言わなかった。

当然だ。クサナギはノエルのロボットだから、ノエルの言うことは何でも聞く。そういう風に

、そのために、造られているから。

「Kタイプ、か」

一瞬そう言ったのが誰か分らなかった。あまり低くない、少年のままの声。今まで向かいで一緒に食事をしていた彼が発した言葉だと理解するのに十秒かかった。

「今時珍しいな……骨董品のレベルだと思ってたのに。まだちゃんと動くんだな、こいつ」

彼はこつこつと、確かめるように、握った手でクサナギの肩を叩いていて、クサナギは微動だにせず、彼の茶色い頭を見下ろして いた。人のロボットを捕まえて骨董品だのまだ動くだの言うのは失礼だろう。確かにクサナギが古いことは自覚しているしツキシロと比べても随分劣る年代物だが、ノエルのクサナギなのに。「詳しいね」と皮肉っぽくノエルが返すと、「そりゃ、仕事だから」と彼は答えた。

「仕事？」

ちっとも話を聞いていなかったもので、勿論彼の仕事は何なのか分らない。

「ああ、えっと」

ノエルが呟いたことで彼はこの三時間が水泡に帰したことを十分に理解したようだった。振り出しに戻ったことに苦笑しながら、

「スプリング社ロボット開発主任の、ケイスケ=イズミです。はじめまして」

右手を出してそう名乗った。

スプリング社。

クサナギやツキシロを作った、ロボット市場の最大のシェアを誇る大企業だ。道を歩いてスプリング社製のロボットに出会わない日はない。ノエルの思惑を知った上であの母親がこの相手を選んだのだとしたら、何と悪趣味なことだろう。

ノエルは初めてまともに彼の顔を見た。

童顔と言うに相応しい、小動物のような可愛らしい顔立ちで、如何にも母親が気に入りそうな顔だと思った。

差し出された手をぎこちなく握って帰る口実を探していたら、イズミがさっと伝票を手に取った。

「あの、わたし、自分の分、払いますから」

こういう時は男が払うものかもしれないが、たった一度会っただけの人に御馳走になるというのは気が引けた。他人に借りは作りたくない主義だ。

「いや、元からぼくが予約したんだし」

案の定、イズミは引かない。残念ながらこういう時にスマートに申し出を断る術をノエルは知らない。助けを求めてクサナギを見上げるが、彼は相変わらずの無表情だ。なんて、役立たずのノエルのロボット。向かいのケイスケを見る。そうか、作ったのはこいつか。

けれど、

「あなたに払ってもらわないといけないほど、わたし、お金に困ってないもの」

口を付いて出た言葉はあまりにも酷かった。

イズミの緑色の大きな瞳から表情が消えた。沈黙が降りる。怒らせたのが怖くて、ノエルは俯

いた。

——こんなこと言うつもりじゃ、なかったのに。

「確かにメンシュハイト社の一人娘のきみがおれに奢ってもらわないといけないほど金に困ってるわけではないだろうけど、一応おれもきみに昼食を奢る程度の金には不自由してないから——ってそうじゃなくって」

イズミがおかしそうに笑った。さっきまでとは色の違う笑顔だった。

「こういう時は、『おまえが払えばいい』ってぐらいの態度で座ってていいって、覚えといて損はないと思うよ」

イズミは給仕係を呼ぶと財布から数枚の紙幣を取り出して、支払いを済ませた。余裕のある態度が余計に癪だった。まるで自分が幼い子供に戻ったみたいで。

恨みがましく見上げると、イズミがまた笑った。

「きみ、面白い子だな」

面白い、とはどういうことだろう。馬鹿にされているのだろうか。ノエルには分らない。

「そんなに嫌なら次払ってくれたらいいよ」

さらりとイズミは言った。

「もしおれと二人っきりなのが嫌なら、誰か友達を連れてきてくれてもいいし。次はどこか遠くへ行こう？」

そこで初めて、まんまとこの男のペースに嵌められていることに気が付いた。いつの間だろう、おそらくついさっきまではノエルが優勢だったはずなのに。貸しを作ったことよりもそのことの方が何倍も悔しいような気がした。

*

「それで、また次も会うことになってしまったの？」

「うん」

目の前には、項垂れたままテーブルに突っ伏しそうなローテンションのノエルがいる。まさかこういう展開になるとは思っていなかったのだろう。俗に言う「営業用」のノエルの猫かぶりはよくできたものなので、そのノエルのペースを崩したとしたら相手は結構な手練れなのかもしれない。なかった。

「遠くって、どこに行けばいいと思う？ 『わたし月に行きたいの』とか言ったらもう会わずに済むかな？」

「スプリング社でしょう？ 本気で『さあ、あの月へぼくと一緒に行こう』って言われたら後戻りできないわ」

「確かに、やりかねない」

ノエルは頭を抱えて天を仰いだ。月に行けるだなんてロマンチックなのにと思ったが、ノエルはそれどころではないようだった。冗談のつもりだったのに、とシャロンは笑った。

——これは少し、面白いことになったかもしれないわね。

絶対に行きたくない駄々をこねるノエルに反して、シャロンは乗り気だった。ノエルをここまで狼狽させた男なら、ぜひどんな男か見てみたい。

「じゃあ、遊園地に行きましょう」

「遊園地？ そんな、思いっきりデートスポットですイチャイチャしてくださいはいどうぞ、みたいなどころに行ったら相手の思う壺じゃない？」

「平気よ。別にとって食われるわけじゃあるまいし。そういう如何にも、みたいなどころに行く方が逆に目立たなくていいのよ」

「そういうもの？」

「ええ、そういうものよ」

実際にはそういうものなのかそうでないのかはシャロンも知るところではないのだが、自信たっぷりにティーカップ片手に頷けば、ノエルはふむふむと納得したようだった。はったりは堂々と言うことが肝心である。にしても、たかだか一緒に遊園地に行ったぐらいでそこまで調子に乗るだなんて、ノエルは相手のことをどう思っているのだろう。

「二人のお邪魔になったらいけないから、私はツキシロを連れていくわね」

友達の彼氏（この場合彼氏と言えるかは微妙なところだが）と遊園地でWデートをするのはシャロンのささやかな夢だったのだ。

「この間埋立地に出来たエレクトリカルランドにしましょう。あそこならうちも衣装で協賛しているから、お父様に頼めば入場パスポートをもらえるわ」

「その必要はないと思うけど」

色とりどりの電飾で彩られたパレードを思い浮かべながらシャロンがそう言うと、ノエルがに冷静に突っ込んだ。

「うちも協賛してるけど、あそこの主催、スプリング社だもの」

「ああ、そうだったわね」

落ち着いて考えれば、機械じかけの夢の国に、ロボットで一財を成したスプリング社が関わっていない方がおかしい。どうやら自分は思っているより浮かれているようだ。

「それならせっかくだから、貸切にでもしてもらおうかしら。好きなだけ乗り物に乗れるわ」

「やめてよ。本気でやりかねないよ、イズミさんだったら」

どうやら、相手の男はイズミというらしい。名前を覚えている程度には、ノエルもその男に興味があるということだ。

「冗談なのに」

「シャロンが言うと冗談に聞こえない」

ノエルは頬を膨らませてそっぽを向いた。どうやらシャロンが乗り気なのがお気に召さないらしい。そんなノエルを置いてきぼりにしてシャロンは続けた。

「うちの家から車を出すわね。ちゃんと迎えに行くから、逃げようたって無駄よ。入口のゲートで向こうとは待ち合わせをしましょう。それから、そうね……ワンピースを一着仕立てないよ」

「ワンピース？ どうして」

「ノエル、デートの勝負服はワンピースと決まっているのよ。最高に素敵なのを仕上げるわね」

スプリング社が機械で夢を見せるのなら、アシスタシア家は服で少女を美しく魅せるのが仕事だった。シャロンの曾祖母がブランドを立ち上げてから約百年、メゾン・アシスタシアの生み出す衣服は女達の心を虜にし続けている。この家で生まれ育ったシャロンにとって、ワンピース一着仕立てるなど、造作もないことだった。今は見習いのデザイナーでしかないが、シャロンの作る洋服がショーウィンドウを飾る日もそう遠くないはずだ。

「え、そんなのいいよ。そこまで気合入ってると思われるの、やだし」

「だめよ、ノエル。恋は戦争よ。手を抜いた方が負けなのよ。そして負けは死を意味するの。最高に美しく飾った戦闘服《コスチューム》で相手を再起不能なまでにノックアウトしないとけないんだから」

「……本当に、そういうもの？」

「ええ、そういうものよ」

シャロンはにこりと笑って、紅茶を一口飲んだ。

「クサナギにもちゃんと報告しておかないとね。ノエルはすぐ予定を忘れるし、朝寝坊だからクサナギに頼んでおかないと心配だわ。それから、それから……」

そこまで言う前から、シャロンはふと気が付いた。

「ねえ、ノエル」

そして、向かいに座るノエルにゆっくりと、尋ねた。

「クサナギは、どうするの？」

ノエルは不機嫌そうに一瞥くれて、遠く、窓ガラスの向こうをぼんやりと青い目で見つめて、
「連れて行くわけない」

乾いた声でそっけなく言った。

「そう、そうなの」

吹けば飛んでしまう枯れ葉のような軽い声だったから、シャロンはそれ以上何も言うことが出来なかった。

待ち合わせの時間には相手はもう既に来ていて、腕時計を見ながらノエルとシャロンを待ちわびていたようだった。ノエルを見つけると軽く右手を上げる。その仕草がわざとらしくもなく自然だったのが、シャロンには不思議だった。

「初めまして、ケイスケ＝イズミです」

シャロンは、そう軽く挨拶したケイスケの頭の先から爪先までを舐めるように見つめた。

明るい茶色の柔らかい猫毛には、寝ぐせなどというものは見当たらない。細身の黒いジャケットもよく似合っていて、ともすれば子供っぽく見られそうなケイスケの雰囲気を知的に演出している。背は高くないが、等身が高いのだろう、そんなにスタイルが悪いようには見えない。特にブランドにこだわっているようではないジーンズも上手く着こなしていて、自分に似合うものどそうでないものをきちんと理解している頭の良さが感じられた。

――機械ばかりいじってるチェックのシャツ着るしかない理系男子、ではなさそうね。

文字通り背伸びをしない等身大のコーディネートに、シャロンは頭の中でとりあえず及第点を出した。

「シャロンです、今日はお誘い頂き光栄ですわ」

にこりと笑ったシャロンに笑みを返しながら、ケイスケは隣のツキシロを細めた緑の瞳で見上げたが何も言わなかった。

「えっと、これが入場パスポート」

ケイスケは銀色のパスポートを四つ取り出して手渡した。晴天の太陽をぴかぴかと反射する、誰もが欲しがると言われるサイズのパスポートを、きっと彼は難なく手に入れたのだろう。

パスポートをスタッフに見せてゲートを抜けると、大きな噴水と青い屋根の中世風のお城がシャロン達を迎えた。オープンしたばかりの電気カルランドはわくわくとどきときを抱えた人波で溢れかえっていて、シャロンは少し眉をひそめた。想像はしていたがそれ以上の人出だ。ノエルが機嫌を損ねないといいけれど。

「どれか乗りたいアトラクションとかある？」

案の定パスポートの一ページ目の地図を仏頂面で覗みつけているノエルに、ケイスケが訊いた。これは、早々に「帰りたい」と言い出すレベルだ。ノエルはケイスケの顔と地図を交互に見比べるが、何も言わなかった。

「あれに乗りたい」

シャロンがハラハラとしていると、ツキシロが助け船を出すように大きな鉾山のアトラクションを指さした。岩肌の斜面を列車が猛スピードで駆け抜けて行く、要はジェットコースターだ。

「ああ、あれ。分った。あれは並ぶから、先に行ってパスを取りに行こう」

ケイスケはそう言うと、地図も見ずに歩きだした。気を抜いたらファンタジックな風景に惑わ

されてたちまち迷路になってしまい そうな街道をケイスケはすたすたと歩いて行く。ツキシロは当然のようにシャロンと並んで歩くので、自然とノエルは先導するケイスケの横を歩くことになる。

「道分るの？」

ツキシロが尋ねると、ケイスケは肩をすくめて、

「建設途中からシステムのなんだかんだで呼びだし食らってたから、分るよ」

専門はロボット作る方だけど、と笑った。

それからケイスケは、隣のノエルに小声で、「ワンピース、よく似合ってる」と囁いた。俯いて地図を見つめて足を動かすだけだったノエルは頬を薄く染めて顔を上げて、ケイスケと目が合うとすぐにまた顔を伏せる。

シャロンが今日のために仕立てたワンピースは、白のシンプルなものだが胸元と裾にレースがあしらってあり、清楚で可愛らしい雰囲気醸し出している。ノエルの金髪にもよく似合っていて、我ながらいい出来だったと頷いていたところだった。

「そっちじゃなくて、こっち」

いきなり褒められて動揺したのだろう、地図を見ながら全くの反対方向に向かって歩き始めたノエルの手を、ケイスケはさっと取った。苦笑しながら、逆さの地図の上下を正しく戻す。

「もしかしてきみ、その、方向音痴？」

ノエルは不機嫌そうにこくん、と頷く。シャロンも地図を見るのは得意ではないが、ノエルは筋金入りの方向音痴だった。

さりげなく繋いだノエルの手を、ケイスケは離さなかった。

——確かに、結構手強いよね。

シャロンは、ケイスケの背中を見つめながらそう思わずにはいられなかった。計算だとしても、天然だとしても、これは強敵だと言って過言ではないだろう。

それからも全てがケイスケのリードで進んでいった。最初は機嫌の悪かったノエルも、アトラクションに乗るたびに表情が明るくなっていった。あからさまに機嫌を取るわけではないのにそれができるケイスケの器量に、シャロンは舌を巻いた。頭の良い人と回る遊園地はこれほど楽しいのかと実感させられた気がした。

昼食はポップなエレクトリカルランドそのままの雰囲気のレストランで取った。当然のようにケイスケが三人分（ツキシロは進んで食べることはしない）を払い、この間もこうやってノエルも奢られたのだろうかあとシャロンは思った。見事な手際のよさだった。

クサナギの特性がその「隙のなさ」にあるのなら、ケイスケの特性は「そつのなさ」だ。

張り詰めているわけでもない、あくまでも自然体で自分のペースで物事を上手く回してしまう。しかし、だからこそ警戒はしにくいし距離の取り方が難しい。可愛らしい外見に騙されてはいけない。

シャロンにはケイスケの底が見えなかった。

「ねえ、次はあれに乗りましょう？」

シャロンはそびえ立つ観覧車を指さして言った。「了解」と頷いたケイスケが歩き出すのを見てから、シャロンはツキシロに耳打ちする。ツキシロは二つ返事で頷いて、ニヤリと笑った。こういう時、ツキシロはとても生き生きとした顔をする。

観覧車は遠くからでも十分な存在感があったが、近くで見ると首が痛くなりそうなほど大きかった。眺めが売りのシースルーの透明なゴンドラと普通のカラフルなゴンドラが、ゆっくりと、それでも着実に回っている。

「えっと、どっちに乗りたい？」

ケイスケが二つのゴンドラを見比べて言う。ノエルはどちらにするか悩んでいるようだった。

目配せすると、ツキシロは言った通りにノエルの手を取って、逃げるように走ってゴンドラに飛び乗った。呆気にとられている係員は慌ててゴンドラの扉を閉める。追いかけてしようとするケイスケの右手をシャロンはさっと掴んで首を振った。

「えっ、どういう……」

今日初めての顔を見せて、ケイスケの緑の瞳がシャロンを見下ろす。その視線を受け止めて、けれど何も言わずにシャロンは微笑んだ。

ゴンドラに乗りこんだツキシロはひらひらと手を振る。ノエルはきよろきよろと、ツキシロとシャロンの顔を交互に見つめるばかりだった。ノエルとツキシロを乗せた青いゴンドラはゆるゆると上っていく。目も眩むような空の旅。これであと十五分は二人は地上に戻ってこない。

「ごめんなさいね」

ケイスケは困惑したままで「いや、謝らなくてもいいけどさ」

「あなたと話をしてみたかったの」

そう言うだけでケイスケはシャロンの意図を理解したようで、表情を随分と柔らかくした。

「Tタイプの性格は、享乐的で自由奔放。若干刹那主義的な面があり、好奇心旺盛っていうのを忘れてたよ」

ベンチに座るシャロンに買ってきたばかりのジュースを手渡して、ケイスケは苦笑した。不快感を与えるほどには近すぎず、疎外感を感じさせるほどには遠すぎない距離を空けて、彼も腰を下ろす。

「ツキシロがロボットだって、気付いてたのね」

シャロンとツキシロが連れ立って歩いていると、精巧に造られたツキシロを人間だと勘違いする人は多い。「素敵なボーイフレンドね」と言われる度、シャロンは否定もしないし肯定もしない。勿論、ツキシロ自身も。

「そりゃあ、おれが作ったロボットだから。見ればわかるよ」

ならば当然ケイスケは、クサナギもロボットであると知っているのだろう。

「Kタイプの性格は？」

「あれはそこまで設定してないんだ。『人間に忠実、職務を遵守』っていうぐらいのプログラミングしかないよ」

それを聞いてシャロンは妙に納得してしまった。確かにこれほどクサナギに相応しい言葉はない。クサナギは決してノエルを裏切らないし反抗しない。

「あの子と仲が良いんだね」

カラフルなゴンドラを見つめながらケイスケが言った。ノエルとツキシロの青いゴンドラはまだ九十度ほど上ったところで、降りてくるにはほど遠い。今頃はツキシロがノエルに適切な説明をしていることだろう。

「別にとって食おうとかそんな気じゃないよ」

「ケイスケさんは本当に頭が良いのね」

こちらが言わんとしようとしていることを的確に読んでくれる。けれどそれは自分の考えていることは相手に読ませようとしないう、ある種頑なに守りの姿勢なのかもしれなかった。それを相手に悟られずに出来るぐらいにはケイスケは頭が良いはずだ。

「ちょっと興味があるから誘ってみた、って言うと怒られるのかもしれないけど。今はまだ『面白い子』っていう認識しかないよ、おれには」

「ノエルは人ごみが嫌いで、本当はきっと遊園地なんか好きじゃないの。だけど、今日はすごく楽しそうだったわ」

「そりゃあ、良かった」

ケイスケは嬉しそうに笑う。視線の先のゴンドラはゆっくりと、一番高いところへと近づいていく。

「イズミさんのおかげだと思うわ」

「おれは何もしてないよ。たまたまエレクトリカルランドに詳しかったっただけだよ。ついでに否定しておくけど、そんなに頭も良くないからお綺麗な友情で『あの子のこと泣かせたら許さないっ!』とか言われるとちょっと荷が重い」

「あら、そんなことは言わないわ」

シャロンは少し驚いて答えた。今のはケイスケの偽らざる本音だろう。隠された尻尾の先を垣間見た気がした。ケイスケはしまった、という顔をして、シャロンの視線から目を逸らす。喋り

すぎたことに気が付いたのだろう。

「もしかして、女の子苦手？」

「……きみは超能力者か何か」

ケイスケは大きなため息をついた。「割とうまくやれてる自信はあったんだけどな」

「どうすれば喜ぶかとか、どうすれば嬉しいのかとか、そういうことをシステムティックになぞっていくことは得意だよ。そういう意味じゃ女の子を楽しませるのはそんなに難しいことじゃないと思う。でも女の子って笑ってたと思ったらいきなり泣き出すだろ？」

知識にあることを巧く演じられるぐらいには頭が良い。けれど彼は感情を持って余している。対応することは出来ても理解が出来るわけではない。その不可解さは彼の鋭敏な脳細胞に蓄積していく。

シャロンはベンチから立ち上がり、ケイスケに向き直る。そしてゆっくりと口を開いた。

「ノエルを泣かすことが出来るとすればそれは」

あの強情で潔癖なノエルが涙を見せることを許したのは。

今のところ、長身瘦躯でえらく無愛想なくせに礼儀正しいたった一人しかいない。

「彼女が恋をしている人だけだわ」

シャロンにだって、ノエルは涙を決して見せてくれないのだ。

「おれがそれになれば、きみは思ってる？」

上目遣いのケイスケの視線がシャロンを見上げる。頭の中にぼんやりと何かが浮かぶ。ああ、そうだ。これは行き場を無くした雨に濡れた犬だ。

これがきっと、ケイスケの底だ。

そして彼はきっと、自分が雨に濡れていることにも気付いていない。必死で寒さの理由を探しているのに、その可能性には辿りつかない。

「それは私には分らないわ」

シャロンは最初のケイスケの評価を少し書き換えた。「そつがない」のは変わらない。けれど、少なくともノエルに見えているほど、彼は余裕綽綽ではないはずだ。シャロンの眼にはそう見えた。

「行きましょう、もうすぐ二人が降りてくるわ」

ゆるりとカーブを描いてゴンドラは地上に舞い降りる。シャロンの声に、平静に戻ったケイスケは立ち上がる。

ただ少しだけ。

もしかしたらこの二人は上手くいくかもしれない、と頭の隅でシャロンは思った。

2) セカンドパーソン

ノエル＝ヴァッサーリンゼにはケイスケ＝イズミが何を考えているのか分らない。

第一印象は最悪だったはずだ。第二印象だってきっとそんなによくはない。エレクトリカルランドは思っていたより楽しかったが、喋っていたのはほとんどシャロンとツキシロだった。これでもう会うことはないだろうな、と思っていた。それなのに。

――ああ、分らないと言えば、わたし、もだ。

ノエルはどうしてここに座っているのだろう。何も知らなかったことにして帰れば良かったのに。

見慣れたカフェの扉を開ければシャロンがいつも座る席で、イズミが難しい顔をして分厚い本を読んでいた。レンズの向こうの眇めた緑の鋭い光がページを射抜いていた。今まで、イズミがそんな顔をしているところを、ノエルは見たことがなかった。

向かいに腰掛けても、集中しているのかイズミは中々気付かなかった。スプリング社ロボット開発主任はさぞかし忙しいのだろう。ゆくゆくは彼が跡を継ぐのかもしれないし、そうすれば今のうちに身につけて置かなければいけない知識も多いはずだ。重圧と嫉妬とが付加された期待。まるで他人事のように、イズミの苦労をノエルは思う。

バイオテクノロジーで成功を取めたノエルの母は、ノエルに何も期待することはなかった。

ただひとつ、課されたのは『生きていること』、『生き続けること』。

それ以上にも以下にも、彼女は何も望まない。愛着も執着も愛情も、何もない。

イズミに声をかける気にはなれなかったので、鞆から数学の課題を出した。上級学校で出される課題はそこそこに多い。頭は悪くない方だと思っているが、数学は不得意なのでいつの間にか課題が溜まっていってしまう。こんな時でもなければ自分からやろうだなんて思えないので、ノエルはテキストを広げてシャーペンを持った。

ノエルが頬杖をついて、恨みがましく課題を睨みつけ、ふつふつとわき上がる苛立ちから机を指で突き始めたところで、やっとイズミが顔を上げた。ノエルと目が合うと鋭かった視線がすぐに柔らかくなって、眼鏡を外す。優しく笑うイズミと、そうでないイズミ。どちらが本当の彼女なのか、ノエルには分らない。

「ああ、ごめん……って、え？」

何度か瞬きをして、ノエルの顔をまじまじを眺めた後、イズミは勝手に納得したように頷いた。「つまり、はめられたってことか」

「何の話？」

「いや、こっちの話」

ノエルが眉を顰めて尋ねると首を振る。何のことだか全く分らない。

「何の本？」

小難しい単語を睨みつけてノエルは言った。眉間に皺は寄るばかりだが書いてあることはさっぱり理解できない。イズミは閉じた本の表紙を見て言う。

「ああ、これは大学の」

「……イズミさん、いくつ？」

これもお見合いの時に聞いた気がするが思い出せないなので、もう一度ノエルは尋ねた。落ち着

いた態度や物言いは年上にも思えるが、如何せん童顔なので判断に困るのだ。

「えっと、今十八で、大学三年。三年スキップしたんだっけな。あ、でもおれ早生まれだから二年か」

「同じ年なんだ」

早生まれだとかそうでないとかはこの際どうでもいい。入るだけでも大変な大学に飛び級で入るとは。上級学校に入学して卒業するのもそこそこ大変だったが、イズミのはその非ではないはずだ。

「きみは何やってたの？」

「ただの数学の課題」

何の答えも導かれていないテキストを食い入るように見つめてノエルは言った。外した眼鏡を再びかけて、イズミはノエルのテキストを手取る。頷いて思考すること、約三十秒。

数学の答えより、どうしてここに居るのかを訊かなければならないと頭の隅で誰かが言ったが、それは聞こえなかったことにした。

「そんなに難しく考える必要はなくてさ」

イズミは、ノエルがごちゃごちゃと書き連ねた横に、綺麗な字で数式を書いていく。

「ここを、こうしてこうすると……な」

ノエルの三十分の努力をたった三十秒で、イズミは見事に解いてみせた。無駄な手順の一切ない解答は答えを丸写ししたかのようだ。いや、途中の計算がちゃんと書いてあるという点では解答より分りやすいかもしれない。

「イズミさんは数学得意なの？」

「答えが一つに出るものは割と得意。数学よりも物理の方が得意だけど」

言うが早いか、イズミは他の問題にもさっと目を通していく。年は変わらないとはいえ、相手は大学生なのだ。脳内回路に電子計算機を持つクサナギは数学も計算も一瞬で終えてしまうが、イズミのその様はどこかクサナギに似ている気がした。一通り見終わってから、イズミはノエルを見つめる。

「もしかしてノエル、数学苦手？」

聞き慣れない声にさらっと呼ばれた固有名詞は何だか異質で、それが自分の名前だと分るまでに少しの時間を要した。

「苦手というか、きらい」

紙の上の数字は独自の世界を作り上げていて、ただ目の前をつるつると滑り落ちて行くだけだ。講義は右から左に通り返り行く。頭には何も入ってこないし理解なんて到底できない。ノエルの国の言葉で話してほしい。

「ゼロとイチで理解できるところとか、答えが一つしかないところとか結構楽だと思うんだけどなあ、おれは」

「得意な人はみんなそう言う」

不貞腐れてノエルが言うと、イズミは笑った。「教えようか？」

イズミは解き終わったノートをノエルとの間に置く。クサナギは解答は導き出せるが、教える

ことは出来ない。「理解」できているわけではなく、ただ「解ける」だけだからだ。完全無欠、万能の家事人形《ハウスドール》にも、出来ないことはある。イズミの申し出は正直ありがたかった。

「お願い、します」

「了解」

魔法の杖のようにシャーペンを動かし呪文のように数式を繰り返して、イズミは数学を解いていく。理解できないと思っていた数字の世界とノエルを見事に繋いで、すらすらと。それがあんまり見事だから、ノエルはイズミから目を離せない。

「一つのことにとらわれ過ぎずに、全体的に問題を把握すること、これがコツかな」

イズミの教え方が上手いのだろう。ノエルはすぐに同じパターンの問題を解けるようになった。現金なもので、あんなに疎ましかった数字と記号の羅列も、解ければ何だか楽しく思えてくる。

「解ければパズルみたいなもんだろ？」

そんなノエルの心を見透かしたように、イズミは言った。素直に喜んでやるのは何だか癪なので、ノエルは俯いて続きを解いた。頭の上でイズミがにこにこ笑っているであろうことは容易に想像ができる。

「お嬢様」

そこで、耳慣れた声が、いつものようにノエルをそう呼んだ。

呼ばれて、こんなに時間が経ったんだと思った。いつも時計の針の音と一緒に一秒一秒を刻むように待っているこの時間が、こんなに早く過ぎるだなんて思ってもみなかった。

「ああ、お迎え？」

「お嬢様がお世話になっております」

「ああ、ちょっとお世話しました」

しなくてもいいのに、クサナギは丁寧にイズミにお辞儀をする。にしても、二人してお世話ってなんだ、お世話って。

「……お嬢様、何があったのございましたか？」

「え、何って？」

「お嬢様が自ら数学をお解きになるだなんて」

無表情のままのクサナギは、広げられたノエルのテキストと、そこに広がる解答を見つめていた。クサナギなら一瞬で正解だと見抜くことなど造作もないことだろう。

「わたしだって、やるときはやるのよ！」

「やる時とは、いつでございますか？」

光の照り返るメタルの澄んだ瞳が、ノエルを見下ろす。

どんなにクサナギに発破をかけられても、頑なに机に向かわなかったことを思い出す。ほとんど泣きそうな顔でクサナギに頼みこんで、課題をやってもらったことを思い出す。

「うるさい……もう、クサナギったらいじわる」

「意地悪で結構です」

ロボットだからとか、家事人形のくせにと言うべきか分らないが、クサナギはこういう時、妙

に律儀で頑なだった。きっと嘘を吐くことはプログラムに組み込まれていないのだろう。優しい嘘を吐くのはきっと、人間ぐらいだ。

「仲、いいんだな」

忘れられたように黙って二人を見ていたイズミが、ぽつりと変わらぬ笑顔で呟いた。

「それで、二人で課題をやっただけ？」

「だけ、ってまあそうだけど」

翌日、定位置に舞い戻ったシャロン＝アシスタシアは、ノエルの前で印象的な紫の瞳を大きく見開き、言った。シャロンはとても可愛い少女だ。ただし、口を開かなければという条件を付加した上での話だが。

「せっかく取り計らってあげたのに、ケイスケさんも意外と奥手なのかしら……」

しれっと小首を傾げたシャロンは、それだけ見るとガラスケースに飾られている人形のように清楚で可愛らしくて、ノエルでも騙されてしまいそうになる。

「ケイスケさん」という呼び名に違和感を感じて、この二人はいつの間にこんなに仲良くなったのだらうと思って、この間のエレクトリカルランドの観覧車を思い出す。あの後、ツキシロに連れられてイズミとシャロンの元に戻ると、何もなかったようにイズミに話しかけられて、シャロンに尋ねるタイミングを見失ってしまった。あんなことを考えるのはシャロンの他にいないのに。

そこでやっと、イズミの「はめられた」の意味がノエルにも分った。シャロンがイズミを呼びだしたのだ。そしてノエルにはいつも通りに「カフェで待っている」と言う。何も知らない二人は見事にカフェで落ち合うという算段。

「なんでイズミさん呼んだの」

「いいじゃない、苦手でしょう？ 数学」

「そりゃそうだけど……」

否定の出来ない事実に言い淀んだノエルに、「あとで解答を見せてね」と言う狡猾さも忘れない。シャロンもというか、ノエル以上にシャロンの方が数学が苦手だった。彼女曰く、「あんなもの解けるはずがないじゃない」

「なんて言うか、その、わたしのことを考えてしてくれてるのは分るんだけど」

こういうのは正直迷惑以外の何物でもなかった。イズミのことは嫌いではないが、好きでもなんでもない。そして、好きになりたくもないし、嫌いにもなりたくない。感情というものがもたらす手に負えない揺らぎが、ノエルは一番苦手だった。

「あら、別にノエルのためにやっているのではなくてよ」

ノエルがオブラートに包んで断ろうとしたのをシャロンはぼっさりと否定した。「私は、私の楽しみのためにやっているだけだもの」

「ケイスケさんと居る時のノエルは、クサナギが居る時と同じぐらい、観察し甲斐があるわ」

そう言って、シャロンはとても綺麗な笑顔で笑う。こうなったらもう、ノエルにどうにか出来る問題ではない。頭の中で白旗がひらひらとはためいていた。一度シャロンの好奇心の対象になってしまったら、彼女が飽きるまで待つしか方法はない。それはシャロンとの長い付き合いの間でノエルが学んだことだった。

きっと、シャロンはイズミを気に入ったのだ。

それなら、シャロンとイズミがお見合いをして付き合えばよかったのにとあって、それは素晴らしくよくできた考えだと誇ると同時に、それはどこか寂しいことだと気付いて何だか無性に虚

しくなった。

——ほら、こうやってまた心が揺れる。

どんなに気を強く持っても、理性とやらを総動員しても、これだけは全てを抑えることが出来なかった。

「そろそろ帰ろうか、シャロン」

「お迎えにあがりました、お嬢様」

声に振り向くと、クサナギとツキシロが連れ立っていて、ツキシロは豊富なボキャブラリーを駆使してシャロンに声をかけるのに、クサナギといえばまるで金太郎飴のようにいつもの言葉を繰り返すだけだった。

「そうね。じゃあ、また明日。ごきげんよう、ノエル」

ツキシロの差し出した手を取って、優雅にシャロンは歩き出す。二人の後ろ姿はどこからどう見ても寄り添う恋人同士のような感じだった。ロボットのツキシロと容姿端麗なシャロンは、完成された組み合わせだった。たとえそれが歪な円だとしても、見事に閉じた完成形だと、ノエルは思わずはいられない。

「帰ろっか」

歩き始めたノエルの後ろをクサナギは一定の距離を開けて付いてくる。ノエルが早く歩けば早く歩かし、走れば走る。ゆっくり足を進めれば、またそれに合わせる。必要以上に近づくことはないけれど、決してノエルから離れたたり、ノエルを見失ったりしない。

クサナギはツキシロのように手を取ってはくれないし、イズミのように気も効かない。

それでも、ずっとノエルの一緒に居てくれた、たった一人のロボットだった。

クサナギが家にやってきたのは三歳の頃で、物心ついた時にはクサナギが傍に居るのは当たり前のことだった。研究に明け暮れるノエルの母親は、ノエルの世話一切をクサナギに任せた。発売されたばかりの家事人形《ハウズドール》は、些か値の張る買い物だったろうが、それ以上にノエルの母親を自由にしたはずだった。

父親の「存在しない」ノエルにとって、クサナギは母親で、父親で、友達で、世界の全てだった。

別れの足音が次第に大きくなっていることを、ノエルは知っている。だから、望まないお見合いだって引き受けた。何かを、少しでも変えたくて。

それが他力本願だとも分っている。本当に何かを変えたいのなら、こんな中途半端ではだめなのだ。

『洗淨《クリーニング》のお知らせ』

スプリング社から届いた一通の封筒は、死刑宣告にも等しかった。人が死を逃れることができないように、ロボットは洗淨《クリーニング》を避けては通れない。

けれど、これを死別と呼ぶのか何と呼ぶべきなのか、ノエルは知らなかった。

——イズミさんなら答えを知ってるかな。

ゼロとイチが好きだと言った数学の得意なイズミなら、これを何と言うのだろう。どんな答え

を出してくれるのだろう。もしかしたら、堂々巡りの毎日に終わりが来るかもしれないと、ノエルは思った。

*

「ロボットの頭ん中ってというのは、基本的に二つの部品の集合から出来ててさ、」

ベルトコンベアの上を流れて行く大量の手足には目もくれず、イズミは研究所を奥へ奥へと歩いて行く。導線やチタン骨格がまだビニル皮膚で覆われていないロボットの手足は、無機質なくせに変に生々しくて何だか目を背けたくなる。

——クサナギの手だって、これと同じなのに。

真っ白な裾の長い白衣と眼鏡を纏ったイズミは、すれ違う沢山の研究者達にぺこぺこ頭を下げられていて、『ロボット開発主任』というのは伊達じゃないのだなあと、ノエルはぼんやりと思った。

「電気信号を送受信するニューロン・セルってというのがまずあって、この無数のセルとセルの間を電流が流れることで、ロボットは感情や感覚を知覚することができるんだ」

棘を傘のように広げた虫のようなニューロン・セル。イズミは続ける。

「次に、そうやって知覚した情報を処理する機関が必要になる。それがこれ、ブレイン・ディスク」

まるで手品のように丸く薄い円盤を取り出すと、イズミは得意げに笑った。イズミがくるくると回す度に、銀色の円盤は、蛍光灯の光を反射して虹色の歪みを作って輝く。

「これが、人間の脳に当たる働きをして、知覚した情報を統合したり精製することで、ロボットは活動できる」

「情報を処理するって、どういうこと？」

「人間の場合でも、一度に得られる情報っていうのはすごく多くってさ。人間だと、その情報を一回脳で処理する。右目と左目で 見た世界を統合してるから物が立体に視えるんだよ。人間は目で見た世界を視てるわけじゃない。おれたちは、脳が見た世界を視てる。脳が考えるように考える」

あんまり楽しそうにイズミは話すから、ノエルはほとんどその横顔だけを見ていた。彼は、数学を解いている時と同じ顔をしていた。ふと、思いついたように、

「ノエル、一足す一は何になる？」

得意顔でイズミはそう呟いたが、いくら数学が苦手なノエルにもそれぐらいは分る。これは算数の初歩の初歩だ。

「に」

無然とノエルが答えると、その答えを見透かしていたように「他の答えは？」とイズミは微笑んだ。

「他の答え？」

「ロボットの頭の中だと、二にはならないんだよな」

「どうして？」

「ちょっとした数学だよ、これも」

数学、という単語に芽生えていた興味が一気に尻尾を巻いて、苦手感だけが込み上げてきた。こんなの解けっこないと、ノエルは露骨に眉を顰める。ノエルの見事な態度の変わりようにイズ

ミは苦笑した。

「だからクイズみたいなもんだって、これも」

この間はパズルと言って、今日はクイズと言う。自分だけが握っている答えをイズミは中々教えてはくれようとはしない。へらへらと「さあ、何でだろうな」とはぐらかすばかりだ。

「イズミさんも、意地悪なの？」

「いや、おれはどっちかっていうと性悪だよ——ってそうじゃなくて」

「じゃあ、今度会う時までの宿題」とイズミは目配せをして、「よし、じゃあ本題に戻る」と言って、先程の話を再開した。

「そうやって、処理された情報が蓄積されていくことを『記憶』っていう。何度も反芻された情報はディスクでの優先度が高くなって、ロボット自身に有益な情報として保存される。それで、こっからが問題」

辿りついた扉には『クリーニング・ルーム』と書かれていた。

「人間でも、年を取ると記憶力が悪くなったり、物忘れが酷くなったりするだろ？ それと同じことがロボットでも起きるんだよな、これが」

地上で初めてスプリング社がロボットを大量生産してから、十五年。人類が老いを克服できないように、ロボットはまだブレイン・ディスクとニューロン・セルの長期使用による電流摩耗を克服出来ていなかった。段々喋り方が不明瞭になっていく。ロボットなのに、頼んだ仕事をし忘れる。変な機械音が内部から響く。最悪の場合、ある日突然ショートして煙を上げて動かなくなる。そんなことが何度も起きた頃があった。主にセルとディスクの耐久性の強化が進められたが、根本的な解決には未だ至っていない。

けれど、ロボットは人間ではない。壊れることはあっても、死ぬことはない。ただ、機能が衰えていくのを待つばかりではなかった。

「だから、セルとディスクをそっくり入れ替える洗浄《クリーニング》が必須になる。まあ、うちのアフターサービスとしては形だけで、大体の顧客はその時に買い替えるんだけどな。嫁と畳とロボットは新しいのがいいらしいよ」

クサナギはまだ何も変わらない。いつもと同じ隙のなさでノエルに仕えていて、少しも歯が立たないのも同じだ。けれど、それはいつまで続くのだろうか。続いてくれるのだろうか。

「ディスクを入れ替えたら、今までの記憶は全部なくなってまっさらになる。人間における生まれ変わりみたいなもんかな。魂は同じだけど違う人格、って感じだと思うよ」

ノエルは『クリーニング・ルーム』という文字を食い入るように見つめていた。イズミの声はまるでまたあの数字のように右から左へすり抜けて行って、ほとんど残らなかった。

魂は同じ。クサナギのまま。

けれど、クサナギは全て忘れてしまう。ノエルのことも。今までの一緒に過ごしたことも、全部。

——わたしのこと見ても、初めてあった人みたいな顔するのかな。

「そうだ」

ノエルが考え込んでいたせいなのか、イズミはそう呟くとノエルの手を取ると、早足ですたす

たとどこかを目指して歩き出した。落ち着いたイズミにしては何だか突拍子のなさが溢れ出ていて、玩具を自慢したい小さな男の子のような顔をしている。あんまりにもイズミが楽しそうだから、ノエルも少しだけ胸が高鳴るような心地がした。

随分と進んだところで、分厚い鉄の扉が現れた。イズミはノエルの手をぱっと離れたかと思うと、目を輝かせてそれを開けようとする。慌てて、扉の前に立つ警備員が彼を止めようとした。

「主任、こちらに部外者の方をお連れするのは些か……」

「大丈夫、入室記録は後で弄っておく」

さらっと恐ろしいことを言ってのけてカードキーを通すと、タッチパネルの数字を軽快にイズミは叩いた。ロボットの研究所なんて今まで縁もゆかりもなかったから訪れたことはない。今回が初めてだ。けれど、何故か既視感を覚えた。重い扉に厳重な警備。ノエルはこれを知っている。

ピコピコという電子音が何回響いたか分らなくなったところで、『CLEAR』の文字が表示され、扉は左右に開いてノエルたちを迎えた。

「洗浄《クリーニング》がそんなに嫌ならさ、新しいのとかどう？」

目の前に広がったのはガラスケースに並んだ無数のロボットだった。メタルの眼の視線が一斉にノエルに注がれる気がする。顔は一体一体違うのに異常なまでの静謐さと集団としての威圧感があって、何だか息苦しい。この空間で動いて喋っているのはイズミとノエルだけだ。

「まだプロトタイプだけど、これは最近出来上がったばかりの最新型のWタイプなんだ」

イズミは、ロボットたちを前にして、演説をするように言う。

「Wタイプはさ、三十ヶ国の言語を瞬時に理解して会話することが出来て、なおかつ動物語も理解できるからペットの世話にも最適。眼球には望遠レンズを使用してるから二百メートル先まで透視できる。人間には見えないものも当然良く見えるってわけ。今回はビジュアルだけじゃなくて性格にも個性を持たせてみようと思ってさ、二七五の項目について自由にカスタマイズできて……」

イズミが熱心に語る言葉の一つ一つが、対称的に少しずつノエルの感情を冷たく冷やしていった。自分が今何を考えているのかよく分らない。けれどこの状況を決して好ましく思っていないということだけは理解できた。

——いらない、そんなの全部、いらない。

ああ、イズミの声は嫌いではない。けれど、ひどく耳障りだった。どうすれば彼はこの無意味な「お喋り」を早くやめてくれるのだろう。

「な、せっかくだからこれを機に買い替えないか？　　というか完成したら一体どれでも好きなのをノエルにプレゼントするよ。K-SNG662の代わりにどうかな？」

一瞬、何を言われたのか意味が分らなかった。通り過ぎているわけではない。ちゃんと頭の中に残っているのに理解できない。

「これとかどう？　W-TNK864、呼称はワタヌキ」

正確には理解するのを脳が拒否したと言うべきか。

——いや。クサナギじゃないのなら、何だって。

パンツ。

音よりも先に映像が飛び込んできて、気付いた時にはイズミが頬を抑えて目を丸くしてノエルを見つめていた。自分が何をしたのかをちゃんと理解するまでに数秒かかった。

人を本気で打ったのは初めてだった。あの母親のことだって、殴ってやろうと何度思っても殴れなかったのに、簡単にリミッターが飛んだ。こんなにも乾いた、大きな音がするのかと思った。

——そうだ。わたしだって、一緒だ。

並んだ無数の試験官と、血脈のように繋がれた無数の機器。

呼吸のように規則的に浮かぶ、大小の泡。

忙しい足音と、翻る白衣。

厳重な警備で守られた、揺り籠という名の牢獄。

そして紡がれる、無機質な呼称。

「FE-007」

「へ？」

「それがわたしの、本当の名前」

面喰っているイズミに、ノエルは笑いかけた。

自分がどんな風に笑っているのかは見えはしない。

けれど、イズミの顔色を見ていると、それが手に取るように分かるようだった。見上げたイズミの戸惑いと恐れすら混じったような顔。わたしはちゃんと「笑え」ている。そう実感した。

「ばかみたい」

そう言い残して、ノエルは部屋を後にした。入るのは難しいくせに出るのはやけに簡単で拍子抜けしてしまった。警備員が怪訝そうな顔でノエルを見つめていたので、それにも微笑んでみると、警備員は僅かに頬を赤く染めて俯いた。

皮肉なことに、あの母親がくれたこの容姿は存外に役に立ってしまう。

「ごめん、その、怒らせたのなら謝るからさ、」

あわただしい足音が追ってきたかと思うと、息を切らしたイズミはそう言った。怯えた仔犬のような瞳が、ノエルを見つめる。この人もこんな顔をするのだなぁと思った。

「別に怒ってなんかないわ」

頭を撫でて往なすようにノエルは微笑みをたたえて返した。イズミはまだ何か言いたげだったがもう追いかけてはこなかった。

ヒールの音がかつんかつん、と音高く響いたから、それに合わせてノエルは声を上げて笑った。悲しくて惨めでどうしようもなかったから、嬉しくてたまらないというように陽気に。

「あはは、あはははっ」

クサナギの代わりにいるように、ノエルにだってちゃんと代わりにいる。

ノエルは「揺り籠」の中の自分を思い浮かべながら、涙も出ない自分にまた笑った。